

ま え が き

本書はアジア経済研究所が2009年度から2010年度にかけて実施した「台湾総合研究Ⅲ——社会の求心力と遠心力——」研究会の成果である。佐藤幸人が主査、寺尾忠能さんが幹事を務めた。また、わたしがおよそ四半世紀前、台湾研究を始めた時からの兄貴分的な存在である沼崎一郎さんには、佐藤とともに議論をリードする役割をお願いし、編者の一人となっていた。

はじめに本書の位置づけを述べたい。研究会のタイトルが示すとおり、すでに台湾に関する2つの総合研究プロジェクトを実施し、成果をいずれもアジア経済研究所から発表している。佐藤幸人編『台湾の企業と産業』（2008年）と若林正文編『ポスト民主化期の台湾政治——陳水扁政権の8年——』（2010年）である。前者は経済分野について、後者は政治分野について論じている。本書は経済や政治と深く関連するものの、2つの領域には収めきれない、しかし今日の台湾を理解するためには欠かすことのできない社会的な問題を検討している。

この一連の研究プロジェクトを企画した動機は、新世紀に入って10年前後を経た台湾に対する理解を総括したかったからである。また、『台湾の企業と産業』のまえがきでも述べたことだが、それはアジア経済研究所の任務であると考えたからである。アジア経済研究所は日本において組織として継続的に台湾を研究してきた唯一の機関とっていいだろう。そして、折につけて広い範囲に及ぶ総合的な研究を行い、成果を世に問うてきた。2000年代後半、再びその時期に至ったと考えたのである。

とはいえ、過去をそのまま踏襲したわけではない。なかでも重要な相違は、過去に行った総合的研究が経済およびそれに関連する問題に留まっていたのに対し、今回は政治や社会にまで研究の射程を拡張したことである。その理

由は、第1に台湾社会が複雑化するにしたがって、多面的かつ複合的に理解することがより求められているからである。経済、政治および社会の領域間の関連性は、以前と比べてわかりにくいものになっている。たとえば「中国」は3冊の本の中に頻繁に登場する。ひとつの論考だけではなく他の論考もあわせて読むならば、台湾にとって「中国」がどのようなものなのかについて、いっそう深い理解が得られるだろう。第2の理由は日本における台湾研究の充実である。1990年代後半以降の台湾研究の質的、量的発展は目を見張るものがある。異なる専門分野間の交流も徐々に進行している。重要なきっかけが1998年の日本台湾学会の設立であることは間違いない。それがなければ、わたしがこの研究会のメンバーの何人かと知り合うこともなかったかもしれない。このような研究状況によって、より総合的な研究が可能になるとともに、それをやってみたいという気持ちを駆り立てられることになったのである。

台湾総合研究の3プロジェクトには総勢23人の研究者が参加し、序論3本を含む29本の論文が生み出された。もとより台湾の多面性や複雑さを考えれば、わたしたちの成し遂げたものはその一部に触れたにすぎないが、それでも今日の台湾を理解するうえで重要な問題の多くに論及していると確信しているし、日本の台湾研究のひとつの里程碑にはなりえたのではないかと自負している。また、23人のメンバーのなかには劉仁傑さん、張茂桂さん、呉叡人さんという3名の台湾人研究者が含まれている。彼らの参加が実現したのは、わたしたちが長年にわたって彼らと行ってきた研究交流があったからこそである。そして、彼らの研究を収め、台湾に彼らのような研究者がいることを紹介できたことは、この総合研究の重要な貢献であると考えている。

台湾総合研究全体について少々長々と述べてきたが、本書の企画についても若干の説明を行いたい。前述のように、本書は経済と政治の領域に収まりきれない問題を論じている。もっともそのような問題は無数にあるわけだが、台湾研究においてアイデンティティあるいはエスニシティを外すことはできない。本書では第1章および第3章から第7章までが関連した問題を議論し

ている。しかしながら、とくに日本の台湾研究において、関心がアイデンティティやエスニシティにやや偏りすぎているのではないかという疑問ももっていた。そこで社会階層（第1章）、ジェンダー（第2章）および社会運動（第8章と第9章）に関しても論じ、台湾社会のダイナミズムについてよりバランスのとれた包括的な分析を目指した。異なるエスニシティや異なるアイデンティティが「交錯」するとともに、エスニシティやアイデンティティと社会の他のダイナミズムもまた「交錯」していることを示したいと考えた。本書のタイトルを『交錯する台湾社会』としたゆえんである。結果的には台湾研究におけるアイデンティティおよびエスニシティという軸のもつ引力の強さを改めて認識した感もあるが、研究の方向性を示すひとつの挑戦にはなっていないと考えている。

いつものことではあるが、わたしたちの研究が多くの方々の善意の協力の上に成り立っていることを、今回もまえがきを書きながら改めて噛みしめている。台湾および中国の調査では多くの方にお世話になった。とりわけ本書は台湾社会を知るために市井の方々にアプローチし、そこで教えられたことを議論の土台としている。また、お訪ねした研究室で、お招きした研究会で、学会のセッションや懇親会で、そして時には台北のコーヒーショップや日本の居酒屋で、たくさんの研究者の方からいただいた示唆や助言は研究の発展に大きく寄与している。審査過程においてはレフリーから貴重なコメントをいただいた。研究会の運営や編集・出版過程では当研究所の関連部門からサポートをいただいている。一人ひとりお名前をあげてお礼を申し上げることはできないが、すべての方々に衷心より感謝申し上げたい。

2011年秋

佐藤幸人